

---

# ゼロの弾正

得津昌景

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

ゼロの弾正

### 【Nコード】

N1296M

### 【作者名】

得津昌景

### 【あらすじ】

乱世の梟雄、松永久秀

その壮絶な最期、共に爆発した数多の家宝の中に久秀自身も知らない謎の鏡があった。それは異世界「ハルケゲニア大陸」へと繋がる扉である。梟雄の中の梟雄、松永弾正久秀、第二の人生がここに幕を開ける。

初投稿で御座います。拙い文章ですが読んでいただけると幸いです。  
ります。あと松永久秀をご存知の方は分かると思いますが謀略話や  
エログロナンセンスがあるので注意を申し上げておきます。

## 第一話 弾正、爆死（前書き）

半分以上が信貴山城の戦いで文章も時代小説風になっております。  
次話以降は何とかしたいですが……

## 第一話 弾正、爆死

大和国と河内国の境にある信貴山城。伊丹城に次ぐ日本で2番目に建造された天守閣（高櫓）に多聞櫓と当時、最新鋭の建築技術で建てられた城である。

その天守閣より一人の老人が城下を眺めていた。乱世の梟雄と言われ、この城の設計者でもあるこの男、名を松永弾正少弼久秀という。

「壯観……よの」

天守閣より見える4万の兵士を眺めながらそう呟いた。

天正5年（1577年）に上杉、毛利を中心に新たな織田包囲網が作られた時に真つ先に謀反を起こした松永弾正は信貴山にて籠城作戦を取っていた。上杉からの救援を待ってのものであったがその予想に反し上杉の軍勢は一向に来る気配が無い。そうこうしている間に織田勘九郎信忠を中心とする4万の兵により囲まれてしまった。織田家からの降伏勧告はすでに拒絶しておりもはや助かる道は残されていなかった。

「彦六」

嫡男の松永久通を呼び出す。今の松永弾正が唯一信頼を置いている人物である。

「お呼びでしょうか、父上」

「もはやこれまで。もとより4万対8千のこの戦、上杉不識庵（謙信）の援軍こそ頼みであったが……それが無いとなれば……ククッ、端から負け戦よ」

弾正は自嘲気味に笑う

「左様でございますか。然らば我も共に」

「ならん」

弾正がピシヤリと言い放つ。

「お前の子も殺され、最早松永の血を継ぐものはお前のみ。なれば

「こそお前は生ききつてくれ」

久通は涙を流しながら

「畏まりました」

と呟いた。

弾正は久通が自分の言を守り城に火を放ち場外に脱出したのを確認した後、宝物庫に足を運んだ。

「ククツ、思えば酷い父親よの」

あのように言ったものの弾正にとって久通の命などどうでもよかった。彼が一人で自害する理由、それは宝の山と共に死ぬ権利を誰にも与えたくなかったからである。

彼にとって名器平蜘蛛釜に代表される家宝は命よりも大事なもので九十九髪茄子を織田弾正忠信長に献上した時は後悔で眠れなかったほどであった。その時より宝と共に眠る権利はほかの誰にも渡さないと誓い全ての茶器は宝物庫に入れ、必要に応じて自分の目の届く時でしか外に出さないほど管理を徹底した。此度の事件でも信長より平蜘蛛釜を条件に助命をすると使者に告げられたときも

「ふざけるな」

と言い使者を放り出した。それほど彼にとって家宝はかけがえのないものだったのである。

平蜘蛛釜に火薬を詰め他の茶器を周りに置く。その時も一つ一つ丁寧に、名残惜しそうに置いていった。

（破壊するのは惜しい代物、だがわしの死後に誰かに使われるのは想像しただけで腹が立つ）

と思いつながら家宝を天守閣の最上段に並べていく。そのときひとつの見憶えの無い鏡を目にした。唐鏡では無い、以前にルイス・フロイスが信長の下に持ってきた西洋式の鏡によく似ている。見覚えは無いが宝物庫にあった、なればわしの物であろうと決め付けそれも同じように並べた。

全ての家宝を並べ終えた弾正は松明の火を持ち平蜘蛛釜に近づいた。梟雄といわれた生涯を思い返し、自然と笑みがこぼれ

「悔いは無し」

と一言呟き平蜘蛛釜に炎を投入した。

こうして松永弾正少弼久秀の生涯は爆死と言う形で閉じた

はずだった。信長の家来たちが信貴山を後に検めたが弾正の死体は見つかってないのだ。天守跡には粉々になった『茶器の破片だけが残っており、弾正本人は見つからなかった。しかし逃げられる場所があるはずもなく、勘九郎は

「誰か判別のつかない焼死体が残っており、おそらくこれが松永弾正だろう」

と父織田信長に伝えた。

トリステイン魔法学院では現在、昇級試験も兼ねた使い魔召還の儀式が執り行われていた。

昇級試験とは言え今まで失敗した人間はおらず、今年も全員が成功していた。ただ一人を除いて……

その人物の名はルイズ・フランソワーズ・ル・ブラン・ド・ラ・ヴァリエール。名門、ヴァリエール公爵家の三女である。彼女は勤勉で、座学の成績もよく成績は常にトップクラスであったのだが唯一にして最大の欠点を持っていた。魔法が使えないことである。魔法至上主義のハルケゲニアにおいて魔法が使えないことは致命的な欠点であった。貴族、平民問わずに陰口を叩かれることも多く、それが彼女を内向的にしていった。したがって彼女には親しい友人と言える人物はいない。しかし、彼女は貴族としての誇りだけは失くしてはおらず、その気高き誇りだけが彼女を支えていた。そして、

その気高き誇りの為、使い魔召還の儀式で名誉挽回したいと思つて今日の儀式に臨んでいた。

しかし現実には残酷である。3回、4回と儀式を繰り返しても起るの爆発だけ。級友達もその状況を見て嘲笑していた。

その状況を見かねた引率の教師コルベールは

「本日は疲れたでしょうから明日もう一度……」

と彼女に伝えたが

「いえ！もう一度お願いします！後もう一度だけ！」

頑なに再度の機会を求め続けた。

「……分かりました。では最後の一回です。これに失敗すれば……」

「分かっています……」

これが最後のチャンス。そう思い彼女は大きく深呼吸をし、杖を気高く頭上に構えた。

「宇宙の果てのどこかにいる私の僕よ。神聖で美しく、そして強力な使い魔よ。私は心より求め、訴えるわ。我が導きに、応えなさい！」

その言葉と共に杖を振り下ろすが起こったのはまたも爆発……しかし今までとは桁の違う巨大な爆発であった。そして辺りに立ち込める硫黄の臭い、これは明らかに今までのルイズの爆発とは違う黒色火薬を燃焼させた時の物である。コルベールは硫黄の臭いから二次災害を危惧し、生徒たちを非難させようとしたがすぐに煙が晴れ、臭いも無くなつた為とその判断をやめた。

そして煙の向こうに一人の男　この男こそ松永弾正少弼久秀、先ほど信貴山城で壮絶な爆死を遂げた人物である。

將軍を暗殺し、東大寺大仏殿を焼き払い、主君の死にも関わつたと言われる乱世の梟雄。その新たに与えられた人生をどうするのかそれは誰にも分からない……

始祖ブリミルでさえも……

## 第一話 弾正、爆死（後書き）

ここまで読んでいただき真に有難う御座います。「愚にして直」な文章でしたが如何でしたでしょうか。感想（そもそも松永って誰？等）やお叱り（弾正って言うから期待したのに保科正俊じゃねえのかよ等）をお待ちしております。

第二話 弾正、接吻（前書き）

第二話にて御座います。

## 第二話 弾正、接吻

信貴山城での最期、平蜘蛛の破片と共に飛んで来た謎の西洋の鏡、そこまでが弾正の記憶であった。

「ここは地獄か……」

もとより極楽浄土など行けるとは思っていない、弾正にとって死後に行く世界があるとすれば当然地獄である。それは本人も重々承知していた。

しかし彼が感じる違和感、それは今、見上げている空が余りに青い事だ。

実際見た人間がないから何とも言えないが、文献や伝承に残る地獄の印象は暗く、そして地底などの空など見えるはずの無い空間である。

しかし、この空間はあまりにも想像する地獄とかけ離れている。弾正は上体だけを起こし周りを見渡した。年にして16かそこらの南蛮人だと思われる童が群がっている。何やら騒いでいるように見えるが……弾正は南蛮の言語はわからない。

ルイス・フロイスに代表される宣教師は皆、日本の言葉を会得してから謁見に来る。簡単な挨拶程度なら分かるが日常会話となると殆ど聞き取れない。

如何にしようかと思案に暮れていると童の中央にいた桃色の髪の少女が弾正の前に歩み寄って来た。服装は彼好みのシンプルな物で、よく見渡すと周りの童は皆同じ服を着ていた、一人の金髪の小童を除いて……

そのような事を思っていると目の前の少女は弾正の頭に手を回し……接吻をした。

（大胆な女だな好きにはなれそうにない）

などと考えていると左手にかつて牢人の盗人集団に捕まり左の胸に焼き印を押された時と同じ痛みが走る。「何をする！貴様ツ織田弾

正忠の刺客か！」

終始冷静に思考していた弾正も思わず頭に血が昇る。

「落ち着きなさい！使い魔のルーンが刻まれてるだけだから！」

痛みが治まり、左手を見るとそこには見たこともない紋様が刻み込まれていた。弾正自身の美意識では身体に入れ墨を刻むなどというのは主義に反するが……

痛みにより冷静になった為に使い魔という言葉と焼き印、その状況を冷静に考える。なるほど、フロイスに聞いた事がある。南蛮では奴隷に対して焼き印を押すらしい。弾正忠の下にいたヤスケという黒人にもあった。これもその類か……などと考えて松永弾正久秀はひとつの結論を立てて目の前の少女に

「この契約謹んでお受け致します。まず今の状況を教えて戴きたいと思って御座います」

服従を選択した。

「なるほど、つまりここは貴族様が集まる学び舎と言うことで御座りますか。それに魔法……いや面妖、面妖」

「魔法もトリステイン王国も知らないって……どこの田舎から来たのよ？」

使い魔召還の儀式を終え、先ほど契約をした少女　ルイズと弾正は女子寮にあるルイズの部屋へと来ていた。必要最小限の生活用品と学習用の本しか無く、年頃の女子の部屋と考えると些か殺風景な部屋である。

そこでお互いに現状の確認をする。「ふーん、魔法の無い国ねえ……しかも戦争中だなんて随分物騒じゃない」

「某と致しましては魔法がある事、そして魔法の使える者が中心となり国が作られてるといふ事が未だ信じられません……」

弾正自身、一度幻術使いに術をかけられ、一応は魔法があってもおかしくはない……程度には思っていた。

彼自身は現実主義者で、神仏や祟りや幻術の類は信じてはいない。しかし一度体験した物は彼の中で真実として扱われる。一度体験した幻術もそして魔法も。ましてや魔法により生かされたのだ、信じる他はないだろう。

「でも……あんだ随分素直に受け入れたわね」

「ふむ……使い魔の契約の事ですか？」

「そう。急に呼び出して使い魔になれなんて言われてさ」

「もとより私は死んだ身ですから……」

因みに弾正はルイズに召還前の経歴についてほぼ正直に伝えてある。無論彼の行った悪行の数々を残して。

ルイズ単独に権力は無く、恐らく父親若しくは母親が国の中で権力を持つ人物なのだろうと予測。ならば両親にただ従順なだけでなく『使える』人間と思われなければならない。でなければこの国の権力の中心には行けないであろうと。そういつた理由でルイズには「商人として全国を行商している間に王国の宰相を務めている貴族と懇意になった。仕えている間に領地を任されたが主君の貴族の一族に不幸があり、また主君の仕えていた王が何者かの凶刃に倒れた。そこで主君の重鎮が反乱を起こし、逃れる為に別の貴族の下に逃れた。そこで王の権力を再び高める為に戦ったがそこでまたも反乱が起き、自害をさせられた」と経歴を伝えた。

尚、実際には「商人をしていたが、弟が三好家で大活躍していた為にコネで右筆として仕えさせてもらった。謀略を駆使して領地を一つ分捕り主君の一族を相次いで殺害、また三好三人衆と結託し將軍足利義輝を殺害、三好家將軍家共に傀儡政権を作り上げる。やがて三好三人衆との対立で勢力を落とす、織田家の上洛をきっかけにして織田家に仕える。そこで自分が殺した義輝の弟足利義秋を將軍に据えるため戦い15代將軍とした。しかし義昭中心の信長包囲網が形成されると謀反を起こし信長と対立、爆死に追い込まれた」といったところか……

因みに貴族と言ったのは弾正少弼という正五位下の官位を名乗

つているため強ち間違いとは言え無い。

「それより、ヴァリエール様も某の様な老人を呼び出して不満はありませんか？」

「まあ、あなたは野蛮なゲルマニアのような貴族だけど平民なんか呼び出すよりマシ出し……我慢するわよ。それに老人って言うほどの年でも無いでしょ。鏡見なさいよ」

そういつてルイズは鏡台を指差す。そこには明らかに20代前半の顔と身体の松永久秀がいた。

「……此処まで来ると最早驚く気も失せますな本来なら70前後の男が此処にいる筈で御座いますが」

「ま、まあ私としては老人なんかよりはよっぽどいいけど」

鏡越しに目が合い、顔を赤らめながらルイズが話す。松永弾正はルイズの目から見ても美形でその上、長く美しい黒髪を持っている。

いつまでも顔を見つめていると顔が赤いのが弾正にばれてしまうのでルイズは話題を変える事にした。

「つ、使い魔の仕事について話すわ！先ず感覚の共有！使い魔の見るもの聞くものが主人である私に伝わる筈……だけど無理みたいね私見えないもん」

「ほう……残念ですな。主君と感覚の共有ができればヴァリエール様に身も心も捧げられましたのに」

「つ、次は主人が望む秘薬を探してくる事！」

「ふむ……それではこの薬などはどうですか？滋養強壮、特に夜の営みに効果が御座いますが」

顔をさらに赤くしたルイズは窓を開け、外の空気を吸った。

（駄目。完全にあの使い魔のペースに陥っているわ……落ちつくのよルイズ大丈夫、あなたは主人あいつは下僕何も遅れを取っている事なんかないのよ）

ルイズは深く深呼吸をして改めて使い魔の方を向き直した

「最後の役割だけ使い魔は主人を守ること……どうしたの？」

先ほどまで自分が若返ったとわかってても冷静だった男が口を開けて

啞然としていた。

「月が……2つ……」

今まで異国に来たものとはかり思っていた弾正はこの時漸く気づいた。国が変わり人間の肌の色や身分制度、百歩譲って魔法や幻術などの存在などは認めるとしよう。

しかし星の配置は変わらないはず……それが全く違い、自分達に取って一番身近な月の数も違う。

混乱する頭を落ち着かせ、弾正は一つの結論を導き出した。

「異世界……」

## 第二話 弾正、接吻（後書き）

お楽しみ戴けましたでしょうか。感想（字面が読みにくい等）や批判（真田幸隆じゃねえのかよ等）疑問（そもそも弾正ってどういう意味等）をお待ちして御座います。

それではまた次話にて

アテブレーベ・オブリガード！

（また会いましょう。お元気で）

### 第三話 弾正、夜話（前書き）

第三話で御座います。今回展開が少なく、会話の場面が多く何度も加筆を繰り返したため、非常に読みづらくなっている事をお詫びいたします。

### 第三話 弾正、夜話

月代さかやきそれは平安時代以降、武士階級の人間が兜や烏帽子を被った時に蒸れて不快になる事を防ぐ為に前頭部から大きく月型に髪の毛を剃った物が起源となっている。その立派な月代を持った男、コルベールは焦っていた。その原因はルイズ・ヴァリエールが呼び出したあの男である。アカデミーの裏部隊に所属していた彼は様々な犯罪者や悪人達の目を見て来た。一つの村の民を皆殺しにした男、金の為に自分の仕えている貴族を暗殺した男、そして殺しを楽しんでいる“部下”。

しかし、奴のような目は見たことが無い。

奴は“殺し”という通常、興奮し一種の錯乱状態で行うような行為を冷静に“狂って”行う事が出来る……そんな目をしていた。

ヴァリエールに服従の態度を示していたからこそ、コルベールは裏を考えてしまう。

それにあのルーン、珍しいあのルーンがもし何らかの力を持っていたら……そう考えたコルベールは召還の儀から今まで、図書館に籠もりあのルーンの正体を探り続けていた。

しかし、ルーンの正体は分かりそうにない。今日は諦めよう

そう思い教師専用の図書館から生徒用の図書館に移動している時に一冊の本が目についた『始祖ブリミルの使い魔達』

「まさかな……」そう思いつつもその本のページをめくっていく。

あるページに指がかかった時にコルベールの顔から血の気が引いた。そのページにはこう書かれていた『神の左手ガンダール』と。

「異世界か……思えば遠くに来てしまったものだな」

弾正はルイズに頼み今日は外で寝る事にした。ルイズ自身、この男と同じ部屋で寝てしまうと……危険だと思っていた。ルイズの危険はコルベールの感じていいるそれとは違う会話の中から感じた自分自身の貞操に関わる危険だ。婚約者もいる身なので、万が一間違いがあつては困る。なので明日以降はまた考えるところとして今日は彼が外で眠る事を了承した。最も弾正は睡眠を取るつもりは無く、外の空気を吸い冷静に今後を考えてる為に一晚を費やそうとしていた。

(ふむ……異世界か……)

改めて考えてみると弾正にとってこの状況はプラス以外の何者でもなかった。何せ自分の今までの経歴を知っている人間と会う可能性がほぼ皆無なのだ。

なればこそ慎重に事を進めなければならぬ。『目的』の達成、その為に。

弾正は懐に入れていた煙管に火を付けた。健康管理を徹底している弾正の唯一の不健康な嗜み、それが煙管である。主に深い思案に入る時に弾正は煙管を吸う。心が落ち着き、冷静な判断が出来る。弾正は謀略を考える時に煙管に火を付けるのが習慣となっていた。

「珍しい匂いの煙草ですな。一本戴けますか？」

闇夜から一人の老人が姿を見せた。長い白髪に鬚長を思わせる美しい髭の持ち主である。

「え、ええ……どうぞ」

懐から煙草の紙包みを取り出し、その老人に渡した。

その時、弾正は心底驚いた。命を狙われる立場に長くいた弾正は人間の気配にはすぐ反応出来る様になっていた。

しかし、その弾正が全く気配を感じる事が出来なかったのである。

「気配を絶つて背後から近づくのは感心出来ません……」

弾正は煙管を吸いながら言った。

老人もまた煙管を吸いながらそれに答える。

「なに、校舎内は禁煙でその上健康管理に五月蠅い奴がいての。こ

っそり吸う為には『サイレント』を掛けて気配を絶つ必要があるんじゃない」

「気配を絶つ魔法……便利な物ですなあ魔法というのは」

「サイレントの魔法を知つたらんのか？初歩的な魔法なんじゃが…

…後、正確に音を絶つ魔法じゃな。」

「生憎魔法も知らぬ田舎町の出身ですので。なるほど音を絶つ魔法か……便利なものですな、幾らでも活用できそうな……例えば夜這いとか」

「！！その発想はなかったわい。くそつあと30年若かったら！300歳を越えた辺りからめつきり勃たなくなつて……」

300を越すまでは勃つたのかと疑問には思ったが、弾正はその事は口に出さなかった。

「ふむ……ではこの薬などどうですか？滋養強壮に効果絶大、20代の力が蘇りますぞ」

因みにこの薬、内容物は高麗人参、蝮、ハブなど『元気』が出そうな物を粉末にした物でルイズに渡そうとした物と同じ物である。なお、残念ながら毒は入ってない。

「ふむ……では有り難くいただいておこうかの。御隠居」

御隠居 この一言で弾正の体温が下がる。

「何の事ですか、某はまだ二十代の……」

「誤魔化さんでもよろしい。話し方を聞けば大体の年齢等わかる。

お主の話し方は七十前後のそれ。その上、政の世界に身を置いていた物の話し方じゃな」

「よくご存知で。これも魔法ですかなご老人？」

「いやあ、これは長年生きて来た中で培った観察眼じゃよ御隠居」

「ほう、その観察眼があれば夜這いなどせずとも幾らでも女など抱けるでしょうに」

「いやいや、女心は難しいわい。今も一人狙っている女がいるのじやがお堅い女での。だからこそ夜這いを仕掛けたいのじやが」

「なるほど、しかし夜這いにも作法が御座います。男性は女性を悦

ばせる為にいますのですから自分勝手な行為はいけませぬ。常に女性の気持ちを考えて行為を行う事です」

「ふむ、なるほど勉強になる。えーとメモは……」  
と、このような話を終始笑顔で続けていた。

一時間程経つただろうか、老人が残念そうに呟いた。

「ふむ……どうやらお客さんが来たようじゃて。残念じゃがお先に失礼しようかの。お休み、マツナガ君」老人はゆっくりと自分の部屋へ帰っていった。

「ええ。お休みなさい……オスマン校長」

弾正との会話も終え、オスマンは校長室の前で自分を待っているであろうコルベルの下へと向かっていた。何か緊急の事だろうか？いや心配性の彼の事だきつと使い魔召還で何かあり、それを気にかけているのだろう。などと考えながら 自室へ向かっているとコルベルと鉢合わせた。

「おお校長、どこにいらしたのですか？部屋にいらつしやらないよ  
うなので探しておりましたぞ」

「騒がしいのう、コルベル君。何時だと思っておる」

「それどころでは御座いません。ミスヴァリエールが召還した男に  
刻まれたルーンの事ですが……」

コルベルが取り出した本を見てオスマンは表情を変えた。

「ガンダールブか……」

「そうです！神の左手です！オールド・オスマンあの男は危険です  
ぞ！すぐに王宮に連絡を」

「ならん、君も見たじゃああの男を。あれは政に長く関わった者じ  
や。」

確かに、とコルベルは思っていた。奴の目は似ているのだから

コルベールに大量虐殺を命令した『あの男』の目に。

「確かに、然らば尚更王宮に」

「考えてもみい。ガンダールブの事を王宮が知り、利用しようとしたらどうなるか」

「……逆に王宮が利用されるやもしれませんね。下手をしたら大戦争に……」

「じゃからこの事は内密にする。大丈夫じゃ。相手は平民、もしも時にはなんとでもなる」

「はあ……わかりました。ですがくれぐれもお気をつけ下さい。平民とはいえ毒などを盛る可能性は御座いますからな」

そう言い残しコルベールは自室に向かった。

「ふむ……」

今、オスマンの中で天秤が揺れ動いていた。その原因は目の前の薬と二人の男の発言。

「平民とはいえ毒などを盛る可能性は御座いますからな」

「滋養強壮に効果絶大、20代の力が蘇りますぞ」

『毒』『滋養強壮』この二つの言葉が天秤の皿の上で揺れ動く。

しかし、最終的にオスマンは

「ええい、ままよ！」

二十歳の精力の可能性を選択した。

その夜、見事に二十代のアレを手に入れたオスマンは秘書に夜這いをかけ、奥歯を二本折られる事になるのだが……それはまた別の話。

### 第三話 弾正、夜話（後書き）

次回で何とか決闘まで進めたいと思います。感想（字面が読みにくい等）や批判（高坂昌信じゃねえのかよ等）疑問（そもそも弾正ってどういう意味等）をお待ちして御座います。  
それではまた次話にて

第四話 弾正、迂闊（松永久秀は静かに暮らしたい）（前書き）

長らくお待ちいたしました。当初の予定とは違い決闘直前まで進みます。

#### 第四話 弾正、迂闊（松永久秀は静かに暮らしたい）

弾正はルイズを起こす為に再びルイズの部屋に戻っていた。

「おはよう御座います。ミス・ヴァリエール」

弾正が目覚めを促す一言を発する。しかし、ルイズは起きない。筋がね入りの低血圧であるルイズを優しい一言で起こすなど無理な相談である。

何度かその手段で起こそうと試みたが全く起きる気配が無いため、弾正は最終手段でルイズに灸を据える事にした。

尚、此処で言う灸とは比喩的な意味ではない。つまり、その後のルイズの反応は……

「ああああっついー！ひ、額がつー！？」

と、なる。

魔法学院の女子寮の廊下を一組の男女が歩いていた。しかし女の額には軽い火傷の跡があり、男の頬には赤い掌の跡が付いていた。「信じられない！よりもよって乙女の顔に火傷の跡なんか作るなんて！」

「むう。しかし声を掛けると言う手段で起きませんでしたので最終手段として……」

「なんで間の手段を飛ばすの！？体を揺さぶるとか、口に水を含ませるとか色々」

「ふむ、水を口に……では次回はその方法で」

「……前言撤回、普通に起こして。後、罰として今日1日アンタ食事抜きだから」

「ふむ……致し方有りませんな、では干飯でも食って今日1日腹を保たせますか」

「……それなら罰の意味が無いじゃない。アンタそれを分かってそんな手段を？」

「ミスヴァリエールは優しいお方ですから、罰を与えるにしても飯抜きや掃除程度と予想致しました」

「……はあ。優しい御主人様に感謝なさいよね。じゃあ私は朝食に行くからこの辺で待ってて」

「畏まりました」

会話中に既に食堂の前まで来ていた2人はそこで別れた。

(それにしても……)

弾正は思う。今日の自分は迂闊だと。普段では己の身を危険に晒すような真似はしない。その原因として弾正は一つの仮説を思い付いていた。

寝不足だと。

これは単に昨日眠らなかったというだけの話ではない。

信貴山城に籠城している間、まともな睡眠が採れなかった。そして、異世界に飛ばされた事から来る命を狙われないという安心がその疲れを呼び起こしたのだろう。今、弾正は普段の半分位しか頭が働いていなかった。

少しでも仮眠を採ろうと壁にもたれかかっていた所

「あれ？ダンジョーさん、どうなさいました？」

と声を掛けられた。

声の主は大和撫子を思わせる黒髪を持ち、顔には初々しいそばかすが残る女性、シエスタである。

弾正とは早朝ルイズの洗濯物を洗う時に知り合った仲で、洋服の

洗い方を知らない弾正の代わりに殆どの洗濯物を洗ってもらっている。弾正は無視をしても良かったのだが本質はフェミニストの彼は返事をした。

「いや、主人が食事中でな本来平民が入れん所だから外で待っておる。それよりシエスタは何をしておったのだ？」

因みに今のところ弾正が貴族だみたいなもののと知っているのはルイスだけである。

「はい、貴族の方々に紅茶を配っていました。」

「ほう、今朝の恩もある故に手伝いをしたい所だが主人の命令で此処を離れられん。すまぬな」

「いえいえ、私が勝手にやった事ですから。……出来たら昼のデザ―ト配りを手伝って貰えますか？メイドが一人風邪で寝込んでて人手が足りないんです」

「承知した。ではまた昼食時に」

それを聞くとシエスタは残りの仕事を片付けに急いで食事に戻って行った。

漸く眠れると弾正は目を閉じたが

「さあ、教室に行くわよ」

そうは問屋が卸さなかった。

今風に言々と大学の講義室のような魔法学院の教室に弾正とルイズは座っていた。

周りを見渡すと尾に火の付いた蜥蜴やら一つ目の化け物など所謂妖怪の類がウロウロとしている。

そんな化け物達の中でも弾正は特別おかしいのか、周りの奇異の視線を浴びていた。

特に気になったのは蜥蜴の隣に座っている赤髪の女と青髪の女だ。その他の視線とは違い片方は熱っぽい視線で、もう一方は冷静に観察をする目で弾正を見ている。

見られているだけでは気になるので話し掛けようとした時に、教室のドアが開いた。教師のミセス・シュヴルーズの登場である。

「皆さん、おはようございます。春の使い魔召喚は大成功のようですね。おや、ミス・ヴァリエールは随分変わった使い魔を召喚したようで」

この一言でクラスメイトのマリコルヌは待つてましたと言わんばかりにルイズに非難を浴びせてきた。

「ゼロのルイズ！召喚できないからって平民を買収してつれてくるなよ！」

教室中に笑いが起こる。

「違うわ！きちんと召喚して連れて来たわよ！それに彼は平民ではなくて貴族よそれも領地を持った」

「何だと！本当か答える！」

弾正は目を擦りながら答えた。

「まあ、本当のことで御座います。商人をやっております時にとある貴族に取り立てられました。その時運よく領地も戴けました」  
「なんだ、成り上がり貴族じゃないか。ゲルマニアのような野蛮な国なんだな」

これは別のクラスメイト、ギムリの一言である。実際ゲルマニアは始祖の血を引かない点や、新興国と言う点で国家としては下に見られていた。

教室中がギムリやマリコルヌの言葉で笑いに包まれている。5人の人間を除いて。

その内2人は弾正と青髪の女、彼らは単純に興味が無いだけで早く話が終わらないか程度に思っていた。3人目はルイズで、恥ずかしそうに下を向いている。4人目は教師のミセス・シュヴルーズでギムリの一言が国際問題を起こさないかと心配そうな顔。そして5人目は……今馬鹿にされている国の人間、燃える様な赤髪を持つ女キュルケである。

バンツ！と机を叩き怒りの形相で言葉を発する。

「ミスタ・ギムリ、今の一言はゲルマニアへの侮辱と見なしても宜しいのでしょうか」

ここで謝っておけばよかったのだが興奮状態のギムリ、過去に色々あった腹いせもあってかさらに余計な一言を付け加えてしまった。「ああ、そうだ。大体、君達のような野蛮人がいるから学校の治安が悪くなるんだ。できることなら出て行ってもらいたいね」

「……解りました。今の一言はゲルマニアに対する宣戦布告と見なして皇帝に進言しておきます。貴公らの首は柱に吊るされるのがお似合いですわ」

一触発、その言葉がピタリと当てはまる状態に教室の空気が張り詰める。その空気を打ち破ったのは教師シユヴルーズの土の魔法であった。

「ミスタ・ギムリ、ミスタ・マリコル又あなた達はその格好で反省してなさい。そしてミス・ツエルプストー、ごめんなさいあなたの国を侮辱するような事を言ってしまったわ。トリステイン貴族として謝罪させていただきます。あなた達2人は侮辱した方々に謝っておくこといいわね！」

口に粘土を詰められた2人はコクコクと頷く。キュルケもそれを見て満足をしたのか静かに座った。もとより彼女は戦争など望んでおらず馬鹿にされたことに対して黙っていられなかっただけである。しかし、戦争の火種と言うのは案外些細な所から出てくるもので日本でも例えば肝付家の例などが挙げられる。互いに友好関係にあった島津家と肝付家。島津家主催の宴会に肝付兼続が招待された時に鶴の吸い物を勧められ、鶴が家紋の肝付兼続はこれに激怒し、この後13年に及ぶ戦争のきっかけになったのである（創作と言う話も）

#### 閑話休題

その後、授業は滞りなく進み、弾正も眼を擦りながら授業の内容を聞いていたが、またしても事件が起こった。ルイズの魔法の爆発である。この爆発で弾正は2つの事がわかった。一つは授業の最

初にギムリが言った『ゼロのルイズ』その言葉の意味、そしてもう一つは爆発の脅威である。

この世界の常識のない彼にとってこの爆発は脅威以外の何物でもない。あの威力は伝え聞く大友家の攻城兵器や毛利家の大筒（大砲）に匹敵、いや身一つで使えらるゝとなればそれ以上か……などと爆発の有効性を戦国の世に当てはめて考えていた。

その時、弾正の頭をふとよぎるのは自分の前の世界での最期。爆死と爆発……そこまで考え、フツと笑った。

（考えて、過去の問題の答えを見つけ出しても今の俺には意味のない事。今の俺に出来るのはこの世界で生きる為にそして『目的』の為に……）

そう思い、弾正はルイズに押し付けられた教室の片付けを再開した。

教室の片付けも終わり、弾正は食堂へと向かっていた。今朝のシエスタとの約束の為であるが、彼は今この約束を死ぬほど後悔していた。

元来ポーカーフェイスである彼の表情からは読み取れないが、睡眠不足の上に想定外の仕事も行った彼は疲労困憊、今にも倒れそうな状態である。

しかし、商人あがりの弾正は、約束を違える事による信頼を喪失する痛さを心得ており、食堂へ行く以外の選択肢をとる事が出来なかった。

「あ、ダンジョーさん」

「シエスタ何か手伝えることは無いか？」

「うーん……あ、じゃあデザート配りをお願いします。でもデザート配りはまだ先の仕事なので、先にお昼を食べていてください」

弾正はそれを承知した。疲労困憊の今の状況では軽く食事をして静かにするだけでも体力の回復になる。漸く静かな時間を過ごせ……

「ガツハツハ、お前が例の呼び出された平民か。大変だったな！」

なかった……料理長マルトーに延々と質問や同情をされて、結局

食事の間も気を休める時間は無かった。

「あのー、弾正さん大丈夫ですか？顔色が白いですけど……」  
流石にこの辺りまで来るとほかの人からも顔色が悪いことが伝わるのか、シエスタに心配された。

「ああ、大丈夫まだ生きています。どこから配ればいい？」

「じゃあこちらの列からお願いします。私は反対の列から配りますので」

「承知した。ではまた後ほど」

と言い、お互いに指定した場所へ向かっていった。

（これを配り終われば絶対に寝る。昼からの授業など出ていたら身がもたぬ）

などと考えていたが……

「君！どうしてくれるんだね！」

「申し訳ありません！」

この会話を聞いて意識はそちらへ向いた。見ればシエスタが召喚の儀式の時に見た金髪の童に頭を下げている。近くの者に聞けばどうやらシエスタの拾った小瓶がきっかけで童の二股が露見したらしい。

（くだらないな。だが相手は貴族、よくある事だ……そう……よくある……）

この時、弾正は五十年以上も昔のことを思い出していた。そうそれはまだ駆け出しの商人だった頃……

『村長！いったいこれはどういうことですか！？』

『落ち着きなされい、与市（弾正の幼名）殿』

『これが落ち着いて居られますか！奈緒は……奈緒は何処に連れて行かれたので御座いますか！？』

『……仕方の無い事だったのじゃ。これも乱世、いやこの封建の世がゆえの事……我らは従う以外の選択肢を与えられておらぬ。与市……いや婿殿には気の毒じゃと思っておるが』

『……奈緒は、幸せになれるでしょうか？』

『ああ、立派な家柄のお人じゃからな。側室とはいえ不自由の無い暮らしはさせてもらえるじゃろうて』

『そ、村長！』

『何じゃ、ほたえんなや（暴れるな）吾介。どうした？』

『な、奈緒さんが……か、河原で』

弾正はふと我に返った

（何を今更昔の話を……うん？持っていたケーキは……）

持っていたはずのケーキ。その行く先を探していると一箇所、先ほどとは違う状況が目についた。それは、金髪の童の顔にベツタリと白い生クリームが塗られている事だ。

「おい！平民の分際で貴族に、このギーシュ・ド・グラモンには向かう気か？」

ギーシュは怒り心頭といった感じで告げてきた。しかし、弾正も先ほどまで思い出していた過去の話が原因か、それとも単純に寝不足から来る苛立ちか、売り言葉に買い言葉を返してしまった。

「黙れい！ただ生まれた環境が人より高いからと言って何の努力も無く、威張り散らす人間を貴族とは呼ばん。あまつさえ女子おなこに手をあげて自分の欲求を満たそうなどは言語道断！貴様は貴族に非ず、畜生と心得よ！」

「……決闘だ！それを配り終えたらヴェストリの広場まで来い。そこで貴様を血祭りに上げてやる！」

それだけ言うとギーシュは取り巻きと共に肩をいからせながら食堂を出て行った。

それと入れ替わりにルイズとシエスタが近づいてきた。

「見てたわよ、アンタどうするつもりよ？平民上がりのアンタがド  
ットとはいえメイジのギーシュに勝てるわけ無いじゃないの」

「ダンジョーさん……あなた、殺されちゃう」

傍によってきて心配してくれている美女二人を余所に弾正は頭を  
抱えていた。

（今日は厄日だ）

後に弾正はこの日の事を振り返り『人生で最も迂闊な日』と表現  
したと言っ。

第四話 弾正、迂闊（松永久秀は静かに暮らしたい）（後書き）

お楽しみいただけただけでしょうか？久秀の過去ストーリーはオリジナルのもので。戸部新十郎先生の松永弾正や笹沢左保先生の野望將軍を読んでふと松永久秀を松永久秀にしたのはなんだったのか？と思い書いたストーリーです。奈緒は実在すると言われている人物をモデルとしたオリジナルキャラクターです。奈緒は久秀の側室で野望將軍では久秀のよき理解者として描かれています。

最後になりましたがご意見（弾正って織田信長じゃねえのかよ）や質問（戦国の知識なら何とか答えられるかも）お待ちしております。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n1296m/>

---

ゼロの弾正

2010年11月6日13時29分発行